ネパールの「ダサイン」祭にみられる ネワール族のジェンダー構造変革の兆し[1]

竹内　愛

はじめに

ネパールのカトマンズ盆地にあるパタン（ラリトプール）に居住するネワール族は、マッラ王朝を築いてきた人々の末裔であり、現在までその伝統を守って生活している。筆者は、2005年9～10月、ネワール族の家庭にホームステイをし、ヒンドゥー祭「ダサイン」についてのフィールドワークを行った。ダサインでは、公的な場では男性たちが儀礼を行うが、女性たちは家庭内での儀礼における一連の役割を実行しなければならない。現地調査では、そうした女性たちの活動を観察した。

一方、これまで女性は普段家庭の外に出ることはほとんどなかったが、近年、女性自助組織「ミサ・プツァ」が成立し、それに所属する女性たちが、ダサインの時に、町でバザーを開き、ダサインに積極的に関わっていた。その活動は、これまでのネワール族の厳しいジェンダー構造を逸脱するものであった。そこで、本論文はダサインにおける女性の役割や活動の変化を考察し、そこに見出されるジェンダー構造の変革の兆しについて論じる。

以下では、まず第1章で、ネワール族の特徴、ならびにネワール族の女性の生活を概説する。次に、第2章で、パタンにおけるダサインでの女性の伝統的な役割を、参与観察の記録をもとに述べる。第3章では、女性自助組織ミサ・プツァの成立と活動を概観するとともに、ミサ・プツァによって行われるようになったダサインでの女性の新しい活動の実態を紹介する。最後に、ダサインにおける女性の活動の変化を分析し、ジェンダー構造の変化について検討したい。

1. ネワール族と女性の生き方

ネパールは、様々な言語、文化を持つ多民族で構成されている。大別すると、インド・ヨーロッパ語系の言語を話す諸民族とチベット・ビルマ語系のそれで

ある。前者は西・南の山地及び低地に住み、ヒンドゥー教を信奉し、カースト制度を有している。後者の多くは北・東の高地、山地高部に居住し、民俗信仰を色濃く保持し、カースト制度は有していない。本研究対象のネワール族は後者に属するが、文化、社会面では、カースト制度の存在など、インドからの影響が見られる。

ネワール族はマッラ王朝時代の 9 世紀ごろから高度な文化を築いてきた。現シャハ王朝のネパール統一、19 世紀中葉のラナ一族の政権独占の過程で、ネワール族はネパール国政の実権を大幅に失った。しかしながら、今日でも多くのネワール商人が盆地内外の経済を支配し、ネワールの高位カーストに属する一部の人々が学者、官吏等としてネパール知識層のかなりの部分を占めている[2]。

筆者が調査を行ったパタンは、カトマンズ、バクタプルと並ぶマッラ3王朝の旧王都の1つであり、マッラ王朝後期(1476－1768A.D.)に繁栄した[3]。パタンでは王朝を担ってきたネワール族が、現在も伝統を受け継いで生活している。ネワール族は、「ケガレ」を恐れ、浄・不浄観によって物事を捉える世界観を持っている。パタンの町の構造も王宮のある中心部を「浄」とし、周縁を「不浄」として、カースト別に住み分けをしている[4]。

カースト制度は4つのヴァルナ（4姓）すなわち、ブラーマン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラに大きく分かれ、更に、ジャーティという職業別カースト集団に細分化されている。異なるジャーティの間では、通婚や食事を共にすることはタブーとされる。

ネワール族の宗教にはヒンドゥー教と仏教（ネワール仏教と呼ばれる密教系の仏教）の両方が存在する。そのうちのほとんどの仏教徒はパタンに居住している[5]。カースト制度は本来ヒンドゥー教と結びついた制度だが、ネパールでは、仏教徒もカースト制度に組み込まれている。ネワール族には独自のカースト制度があり約30のジャーティに分かれている[6]。

ネワール社会では儀礼、祭が非常に多く、親族やカースト集団内の結びつきが強い。ネワール女性たちはそのような伝統的社会で保守的な規律や価値観を厳守して生活してきた。

ネワール社会において女性は、厳しいジェンダー構造に基づいた様々な役割を担っている。すなわち、女性は夫や夫の父系出自集団につかえ、男系の子孫を絶やさないため息子を産むことを期待される。そして、日常生活においては、多くの女性が毎日、家の掃除や洗濯、家庭や寺院の神への朝晩の祈り、家族へ

の食事の準備をしている[7]。また、儀礼においては、公的な場には出ないが、儀礼で使う一式の用意、親族を祭宴に招待して食事をもてなす等の役割を担っている。また、女性は、「生理」「出産」「死」等、女性と関わるケガレ観[8]を幼い頃からしつけられ、そのケガレ観を内面化させ、それに則って生活している。但し、ネワール女性と一口で言っても、属するカースト集団や家庭によりその状況や役割は異なっており、大変多様である。

2. ヒンドゥー祭ダサインの儀礼

⑴　ダサインの意味と儀礼の概要

初めに、ダサインの概要を説明する。「ダサイン」とはドゥルガー・プジャとも言われ、ネパールの国の大祭である。祭は秋の収穫時期に15日間にわたって行われ、その形態は地域によって多様である。ダサインにはいくつかの伝説が存在し、ラムチャンカがランカのラーヴァナを征服し、悪魔に勝利した日を祝う[9]とも、ドゥルガー女神（シヴァ神の妃）がマヒソール（悪鬼の一種）を滅ぼした日を記念する行事とも言われる。

ダサインは、ネパール人にとって重要な行事であり、出稼ぎに出ていた人々もこの時期には故郷に戻る[10]。この時期は、消費も最も活発になる。人々はダサインで贅沢ができるように1年間働き、貯金するのだという。この祭の際に、地位や年齢において目上の人が目下の人に服やアクセサリーなどをプレゼントする習慣があり、人々は、洋服、サリー、クルタ（元はインドのパンジャビ地方の衣裳で、動きやすいためネパールで日常着として普及している）を購入する。さらに、生贄のための鶏、アヒル、ヤギといった高価な買い物もする。アヒルは300～500ルピー（450～750円）であり、ヤギは1000～1500ルピー（1500～2250円）以上もする。

筆者の調査した2005年は、10月4日がダサインの初日で、17日の満月までの14日間開催された。2005年は占星術の関係で祭は1日短くなった。以前はダサインの15日間、官庁は祝日であったが、近年ではその期間が短くなっている。

各家庭で行う最も重要な儀礼は、平年では4日間行われるが、この年は、10月10～12日（祭の7～9日目）までの3日間に集中して儀礼が行われた。パタンでは、9日間にわたり、ダルバール（旧王宮前）広場において、共同儀礼「ガン・ピャカン」が催される。

表 1　ダサインの日程　（2005 年は占星術の関係でダサインが 1 日短くなっている。）

2005 年 ダサイン日程	神話上の伝説	住居 X における 家庭での儀礼	共同儀礼 ガン・ピャカン
10 月 1 日		ソーラサラッダ（祖先祭祀）	
10 月 4 日 （ガタスタパナ）	ドゥルガー女神と悪魔マヒシャスラの闘いが始まった日	家中の掃除、朝から清めの儀礼、種蒔き儀礼	神の仮面を被った 13 人の踊り手が夜、町を練り歩いた後、パタン旧王宮で、踊る。
10 月 5 日-8 日		特に無し。	同上
10 月 9 日		特に無し。プジャのため買い物	同上
10 月 10 日 （フルパティ） （マハ･アシュタミ）		家中の掃除と洗濯、神様への料理をつくる。住居 X にあるアガンへのプジャをする。	同上
10 月 11 日 （マハナヴミ）	ドゥルガー女神が悪魔マヒシャスラの部下のアスラ(阿修羅)1 人を退治	家の神に祈り、寺院の神へもプジャをする。午後から住居 X のあるチョークの中庭のピートでアヒルを生け贄にし、プジャをする。	同上
12 日 （ヴジャヤ･ダサミ）	ドゥルガー女神が水牛の化身である悪魔マヒシャスラの部下のアスラ(阿修羅)を全て退治	住居 X のアガンのある部屋で年長者が人々の額にティカをつけ、祝福。初日に蒔いた大麦の芽を刈り取り、ドゥルガー女神の恵みとして髪に飾る。	神の仮面を被った 13 人の踊り手がパタンの旧王宮前で踊る。儀礼終了。
13 日－17 日		親族間でのティカ儀礼	

⑵　観察記録　ゾーシー･カーストの家族関係

まず、インフォーマントについて簡単に紹介する。インフォーマントとして調査に協力していただいたのは、b1w（ego、b1の妻）（図1参照）である。筆者はこのインフォーマントb1wの家族Bにホームステイし、b1wの夫であるb1の父方の祖父にあたる家長xが実施した親族集団の儀礼を調査した。儀礼に参加したのは、家長xを中心に家族A、B、E、G（元は1つの拡大家族を構成していた）、及びxの弟の家族である（以下、図1参照）。ただし、弟の家族は系譜図には含まれていない。家長xの妻は亡くなっていて、家族A（家長xと次男aの家族）が現在、住居Xに住んでいる（以下、図2参照）。そして、家族Bは住居Xのそばに新しい住居Yを建て、現在住居Yに住んでいる。筆者は住居Yでホームステイをしながら、b1wを中心に家庭での儀礼の参与観察をした。なお、家長xの娘（c、d、f）は、他家へ嫁いでいるので、住居Xでの儀礼には参加しない。

家長xを中心とした拡大家族のカースト集団は「ゾーシー」である。ゾーシーとは、クシャトリヤ・カーストに属するジャーティの一つであり、ゾーシーに割り当てられた職能・代表的職業は占星術師、商人である。一族は代々商売をして、成功してきた。筆者の調査した住居Xは、ダルバール広場の東のゾウガル・トール（地区）にある伝統的なチョーク(回の字型集合住居)の一角にある。現在は家族Aが住んでいるが、3年前までは住居Xで家長xを中心とした拡大家族として４世帯が暮らしており、家の中にかまど（台所）が4つあったという。このように、拡大家族は一緒に住んでいても、食事などを共にはしておらず、核家族単位で生活する。

家長xを中心とした拡大家族は、2002年に財産分与をし、その際に家族A以外は住居Xを出て行った。家族Bは実家から徒歩5分のところにある土地を譲り受け、実家のあったチョークから引越し、新しい家Yを建てた。

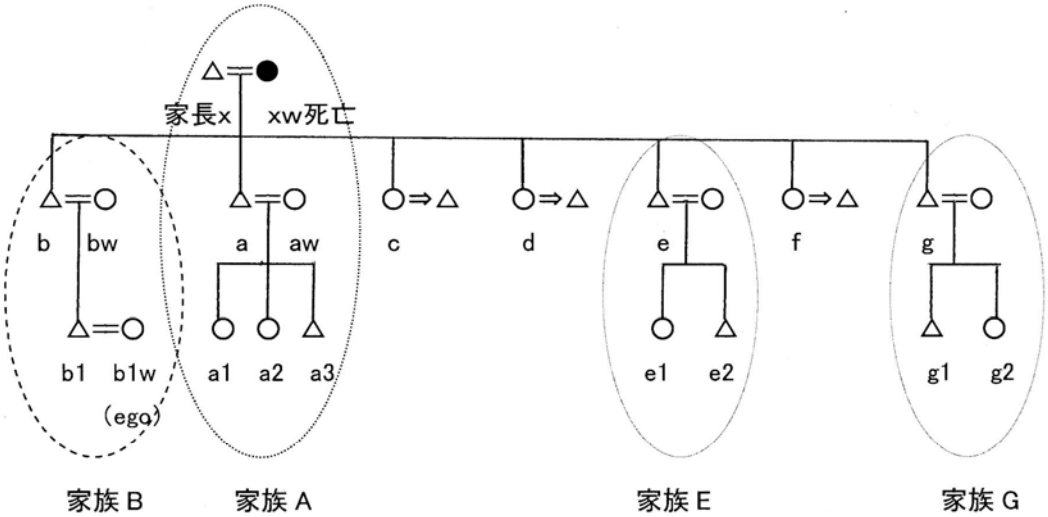


図 1　家族関係の系譜図　△は男性、○は女性を表す。

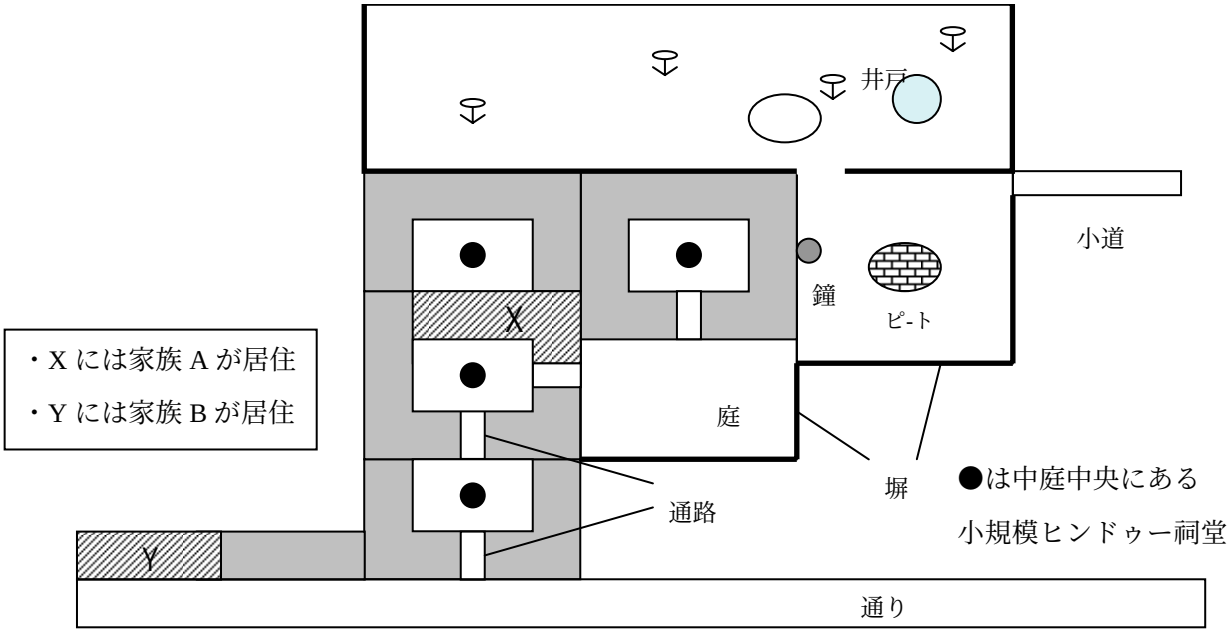


図 2　儀礼が行われた屋敷地の見取り図

⑶　家庭での儀礼における女性の伝統的役割

ダサインの諸儀礼のうち、家庭で行われるいくつかにおいて、女性は、料理、清め、神への祈り、儀礼の一式の準備、親族の招待などの重要な役目を果たし、祭の期間は毎日忙しい。特に、10月10〜12日に行われる儀礼は重要とされる。

以下は、筆者の観察記録である。そのうち、〈10月1日〉「ソーラサラッダ」はB家の嫁（b1w）の実家において観察した。〈10月4日〉「ガタスタパナ」は、親族以外は見ることが出来ないため、先行研究から引用した。〈10月10日〉以後については、住居Yとb1wの嫁ぎ先の拡大家族の家長ｘの屋敷地（チョーク）において、観察したものである。なお、儀礼の様式は、カースト集団によって異なり、さらに同カースト集団内でも家によって細部は異なる。

〈10月1日〉「ソーラサラッダ」（B家の嫁での実家にて）

これは、ダサイン開始前に行われる祖先のための祭祀である[11]。この儀礼の意味は、祖先にも豆料理、菓子、果物等を供えて楽しんでもらうことだという。この儀礼は、その一族の家長の家で行われ、嫁は夫とともに、自分の実家、一族の家長の家、姑の実家の儀礼に出かけていく。儀礼を行う家がすべての準備をし、食費、ブラーマン（司祭カースト）への謝礼も負担する。儀礼は朝行われ、儀礼の前には一切の飲食を禁じられる。

儀礼の日、家長の妻（b1wの母親）は、朝4時頃起きて家中の掃除をし、祖先への供物である、菓子、果物、じゃがいも、米、チューラ（つぶして乾燥させた米）、豆等、香辛料（塩、ターメリック）、プジャに使う花、ティカ（プジャの時に額につける粉）、ランプや水差しなどの器の準備をする。そして、台所の床に赤土を塗り、儀礼を行いうる神聖な場所を作る。

朝8時頃、ブラーマンが家に到着し、30分程雑談の後、プジャが始まる。儀礼中は家長（b1wの父親）とブラーマンが向き合って、祖先へのプジャをする。家長の妻は、プジャの間、ブラーマンの指示で、清めのために家長の右手に水差しで水をかけ続けていた。儀礼では、ブラーマンが、祖先の名前を次から次へと読み上げていく。亡くなった男性の名前だけでなく、女性の名前も出てきていて、総数100名以上の名前が読み上げられる。そして最後に、親族が輪になって、祖先へ祈りを捧げた。その後、親族は、ブラーマンから黄色いティカを額につけてもらう。結婚している人、若い人は赤いティカも受ける。これでプジャは終わる。プジャ終了後、家長の妻は果物、豆、チューラ、菓子を種類別

に袋に詰め、ブラーマンに謝礼として渡す。

儀礼が済むと親族だけですぐ軽宴会が開かれる。また、夜も親族にボウズといわれるご馳走（チューラ、肉料理、豆料理、野菜、ヨーグルト、果物、菓子）が出される。

〈10月4日〉「ガタスタパナ」（種蒔き）

ダサインの最初となるこの行事は、各家庭で行われる「儀礼的苗床作り」である[12]。一族以外はこの苗床を見てはならない。筆者もホームステイ先でこの苗床はダサインの儀礼が終わるまでは見せてもらえなかった。儀礼後見させてもらった所、神の部屋の隅に苗床を作り、上からボールをかぶせてあった[13]。

〈10月10日（ダサイン7日目）〉午前・家中の清めと特別料理（住居Yにて）、午後・アガンへのプジャ（住居Xにて）

この日からの3日間が、家庭での儀礼において重要である。初日のこの日は、女性が家中の掃除と洗濯をする。また、神に供えるウォー（ネワール特有のお好み焼き）や多くの豆料理を1日かけて作る。

女性は朝、真紅のサリーを着て家の神に祈り、その後、寺院の神へもプジャをしに行く。この日はプゥキ（父系出自集団）[14]の神である「アガン」にプジャをする重要な日である。昼過ぎからアガンのある住居Xに、拡大家族が集まった。総勢17人が参加した。そして、ブラーマンによって住居内にあるアガンの前でプジャが執り行われる。この儀礼は住居Xの4階の部屋で行われたのだが、アガンは、一族以外は見ることが許されないので、筆者は4階へは上がっていくことができなかった。女性がアガンへ行くことを禁じている家もある。

〈10月11日（ダサイン8日目）ドゥルガーへの生贄（ピートにて）

住居Xのあるチョーク横の中庭内のピート[15]で、ドゥルガー女神へのプジャをする儀礼が行われた（写真1、図2参照）。ヒンドゥー教徒は女神の前に、水牛、ヤギ、アヒル、鶏などの生贄を捧げることで、シャクティ[16]といわれる力を得られると信じている。最

写真１　ピートでのプジャ

近では、動物の代わりに、卵、カボチャ、ココナッツを神の前に捧げ、それらを割る儀礼を行う人々もいる。

この儀礼には、25人の親族が集まった。内訳は、家長xを中心とした元の拡大家族のメンバー（家族A、B、E、G）と家長xの弟の家族である（図1参照）。

この一族では、ドゥルガーへアヒルの生贄を行った[17]。10年前には、アヒルを12匹生贄として捧げていたという。親族一同が家長xの屋敷地に集まり、ブラーマンによってプジャが行われる。儀礼の前には誰も一切食事をしてはならない。bwはこの日も朝8時から住居Xへ出かけ、儀礼の準備をしていた。b1wも朝から昼まで、食事の準備をしていた。この食事は、儀礼から帰宅した後に、自分たち4人（b、bw、b1、b1w）が取るものである。

儀礼は昼12時ごろから始まった。ピートで、ブラーマンと家長が共同で行う。ブラーマンはドゥルガーへプジャをし、その間家長は炭に火をつけてそれを炊き続ける。bwは、儀礼の最中も供え物の果物、菓子、聖水等の準備をして忙しい。

アヒルに聖水がかけられ、一旦放たれる。アヒルが震えるとケガレが落ちると考えられている。そして、ブラーマンがアヒルの首を切り、血をドゥルガーへかける。生贄をしている最中はピートの横にある鐘を鳴らし続ける。

生贄を捧げ終わると、親族全員が靴を脱ぎピートに上がってプジャをする。順序は家長の男性、それから男児、次に嫁いできた女性、最後に女児というように、男性が女性に優先される。

そして最後に、ブラーマンから家族全員がティカと供物のお下がり（バナナ、りんご、菓子）を受け取る。また、お礼として、各人が約5〜100ルピーをブラーマンに渡していた。この時も先のプジャと同じ順番である。

儀礼の後、アヒルは家の者によってさばかれ、この日のうちに調理される。

このように、家庭での儀礼は忙しく過ぎていく。家長の男性には責任ある仕事が任されているが、他の男性には取り立てて仕事は見当たらなかった。道端で、男性や子ども達がトランプ遊びをする姿をよく見かけた。また、大人も子どもも関係なく凧揚げに夢中であった[18]。しかし、女児が凧揚げすると雨が降るという言い伝えがあって、遊ばせてもらえないようだ。女児は母親の料理を手伝ったり、掃除をしたりと忙しい。

〈10月12日（ダサイン9日目）〉住居Xでのプジャ

この日は、家庭での重要な3日間の儀礼の最終日である。早朝からbwは住居Xへ儀礼準備に出かけ、b1wは近くの寺院を巡ってプジャを行った。その後、昼から、住居Xに親族が集まり、ダサイン初日に蒔いたジャマラという草を刈り取り、親族間でその恵みを祝う儀礼を行う。この儀礼はアガンのある部屋で執り行われたため、筆者は立ち会うことができなかった。しかし、儀礼が済んだ後、筆者のために同様の儀礼をして、内容を教えてくれた。それによると、親族は家長からティカを額につけてもらい、ジャマラを受け、それを自分の耳に挟む。それから、チューラ、ウォー、魚、豆料理を受け取り、酒（ロキシー）を飲む。この時、杯の中に自分の顔を映してから飲むのが決まりであるという。

〈10月13日〜17日（ダサイン10〜14日目）〉

ダサインにおける家庭での最後の儀礼は「ティカ・ヴィジャヤ・ダサミ（ティカの祭宴）」である。神話の中で、悪魔との戦争にドゥルガーが勝ったとされているので、その戦勝を祝うために、それぞれの家が親族を家に招待し、賭けトランプや雑談をして、ご馳走をふるまう。

この祭宴の期間に、父方、母方の両方の親族の家に行く。ご馳走として、チューラ、豆料理、肉料理、ヨーグルト、果物、甘い菓子が出される。また、年長者が若者にティカ、ジャマラ、お金をあげる習慣がある。金額は5、10ルピーであることが多いが、100ルピーを与える家もあった。この儀礼では、若者は年長者を敬い、また年長者は若者に神のご加護があるように祈る。

この祭宴の期間中、人々は、姑の実家、自分の実家、自分の実の父親の実家などあらゆる家から呼ばれるので、日にちが重なる場合には朝と夜で行き先を変えたりして忙しい。b1は兄弟姉妹がいないので、家に招待しなくてはならない人はいないそうだ。

このパーティには、おしゃれをしていく慣習があり、金のアクセサリーと宝石を身につけ、既婚女性の象徴である、「赤いサリー」を着ていく。見栄の張り合いになることもある。嫁姑が揃いのサリーを着ると仲の良い関係であるとされ、揃いのサリーを着ることもよくある。

以上が、ダサインにおける女性の役割である。先述の通り、ダサインの内容はカースト集団、家によっても異なり、女性の役割も全く同じというわけではない。加えて、女性の年齢、夫が健在かどうか、姑、嫁、娘などといった立場

によってもそれは異なる。例えば、筆者が参与観察した家長の妻（bw）は、住居Xでのプジャの一式を用意するという重要な役割を担っていた。この役割は彼女以外には担うことができない。なぜなら、この役割は、拡大家族において最年長であり、さらに、夫が健在である女性が担うという習わしがあるからである（夫に先立たれた女性は不吉とされている）。家長の妻は朝早くから住居Xへ出かけ、神に捧げる料理を台所でつくり、アガンでの儀礼、ピートでの儀礼の最中も、必要な一式を準備し、忙しく働いていた。また、嫁（b1w）は住居Yの清めや家の神、寺院の神への料理をつくり、祈りを捧げる役割を担っていた。

だが、以上で明らかなように、拡大家族の内部で行われるダサインの重要な儀礼、すなわち、アガン、ピートで行われる儀礼での女性の役割は、押し並べて、男性の補助的なそれ、あるいは儀礼のための準備などに限られている。また、祈りの順序は、必ず男性の後である。このように、ネワール族の男女間には明確な役割分担、つまり、ジェンダー構造が存在している。

更に、家庭外、すなわち公的な場における儀礼である「ガン・ピャカン」の担い手は男性だけであり、女性はそこから完全に排除されている。この儀礼について、以下、簡単に述べる。

⑷　共同儀礼「ガン・ピャカン」

「ガン・ピャカン」とは、ダサインの初日から9日間（2005年は10月4〜12日）にわたり毎晩行われる神の踊りの儀礼であり、グティ[18]によって執り仕切られる。この儀礼は、昔パタンの王様が自分の夢で出てきたことを実際に再現させたのが始まりだそうで、パタンでしかみられない。踊り手は13人で、全て男性である。彼ら13人はアシュタ・マトリカと呼ばれる8人の母神[19]、ならびにバイラヴ（男神）、ガネーシュ（男神）、クマル（男神）、シンギニ（守護者）、ビャンギニ（守護者）の仮面をつけ、それぞれの神の衣装をまとい、手には武器を持つ。儀礼中毎晩、ナガバヒル・トールからパタン・旧王宮前広場の旧王宮まで、左右へ剣を突きつけながらやや速いスピードで踊り歩く。人々は踊り手たちと共に歩いたり、窓から見物したりしていた。踊り手は夜9時半頃旧王宮に着き、そこで待ち受けていた音楽隊の演奏に合わせて30分程神の踊りを踊る。彼らは輪になって体を揺さぶり、激しく踊る。また最終日には、パタンのコクナという地域で羊の生贄の儀礼があり、その血を飲んだ人たちが、早朝からパタン旧王宮前広場に向かって歩いてきて、昼にそこで神の踊りをする。

以上の通り、ダサインでのネワール女性は、家庭外の儀礼からは排除され、また、家庭内の儀礼においても男性の補助的な役割に留まっている。しかし、近年、自助組織ミサ・プツァの設立に伴い、女性も公の場で別の新たな活動を始めている。次の3章では、それについて述べる。

3. 女性自助組織とダサインにおける女性たちの新たな活動

⑴　女性自助組織「ミサ・プツァ」の成立

「ミサ・プツァ」とは、ネワール語で「女性グループ」を意味する。パタンでのミサ・プツァは、1996年コミュニティ開発局（CDS）が国内外のNGOの援助を得て、パタンの貧困地区である11区と17区にそれぞれミサ・プツァを養成したことに始まる[20]。

1999年には都市経営計画（Urban Management Program）が、国際NGOの手助けによって実現した。このプログラムは、パタンにおいて、各家庭にトイレを設置すること、寺院を修復すること、ならびに女性の自立を支援することを主目標にしていた。その一環として、CDSはミサ・プツァを5つ養成（4、9、13区のそれぞれに１つ、14区に2つ）した。これらのエリアは貧しく、低カーストの人々が住んでいる。ミサ・プツァの養成事業は、この1999年のプログラムを最後に終了した。しかし、行政がつくったミサ・プツァの影響は残り、評判を聞きつけた女性たちがパタンの各地域で、ミサ・プツァを自発的に形成した。

このように、パタンでの最初のミサ・プツァは、女性たちの中から自発的に誕生したのではなく、国際NGOや行政という外部からの力があってできあがったのだが、パタンの女性たちは今度は内発的に各地でグループをつくりだしたのである。現在ではパタンに60以上のミサ・プツァがあるといわれているが、CDSもその数をはっきりと把握できていない。

ミサ・プツァのメンバーには、同地域に住んでいれば加入できる。パタンでは、カースト集団ごとに住み分けをしているので、各ミサ・プツァは原則として、同じカースト集団の人で構成されており、その数は大体30〜70人である。

ミサ・プツァの活動としては、まず、マイクロファイナンスが挙げられる。これは、ミサ・プツァのメンバーそれぞれが毎月50〜100ルピー（75〜150円）を家から持ち寄って基金を創設し、融資を必要とするメンバーに貸し付けるというものである。また、ミサ・プツァは行政から活動団体として認められており、連携関係を保っている。ミサ・プツァは、CDSに登録申請をすれば、ミサ・

プツァ単位で、CDSからグループ運営方法の指導、健康増進についての講義、広報を受けることができる。また、CDSは、読み書きができないメンバーに無料で生涯教育を受ける機会を提供したり、洋裁などの職業トレーニングをしたりしている。

ミサ・プツァをつくったことで、今まで家の中に閉じこもっていた女性が、近所に住んでいる女性と知り合いになるチャンスができ、ミーティングを通じて、自分の悩みを他のメンバーと相談できるようになった。

⑵　ダサインにおけるバザーでの出店―ジェンダー構造の変革の兆し

近年、ネパール・バサ・マンカカラ（1977年に創立されたネワール族の組織であり、ネワール語、ネワール暦を政府の公用語、公用暦の1つに加える等の運動をしている）が、ネワール文化の再興を企画し、ダサインの期間にパタン・ドカにある集会場で、「Yala Newa Mahotsav」(パタン・ネワール族・バザーという意味)を行っている。筆者が調査した2005年は10月1～5日に開催された。

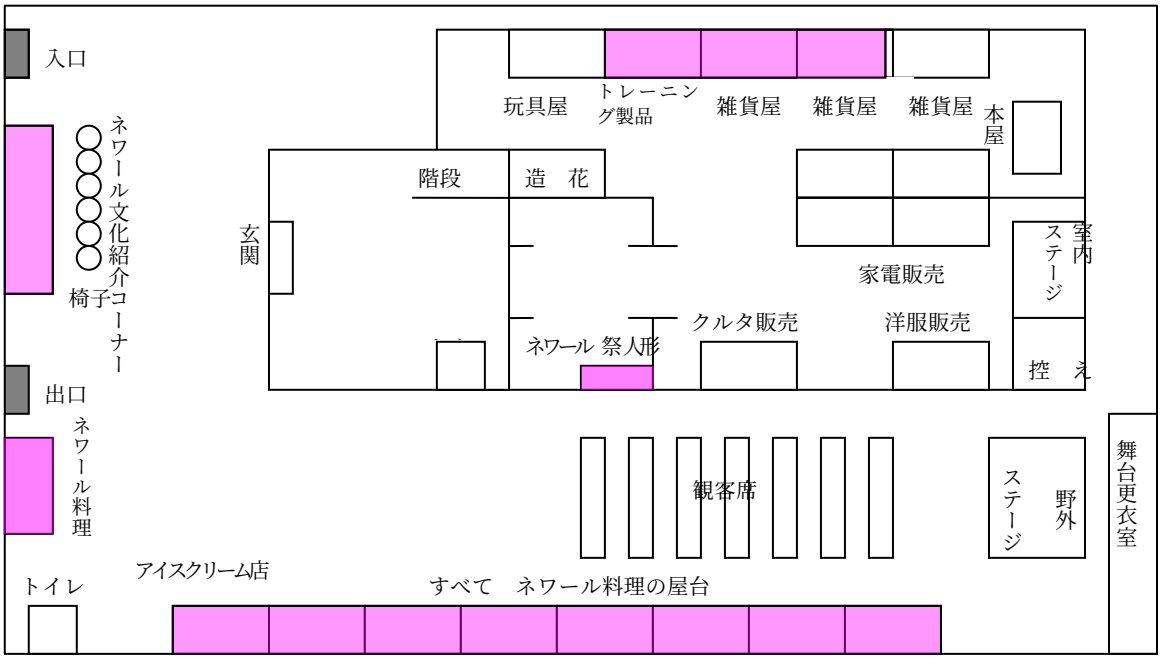
写真 2　ミサ・プツァの出店

このバザーは、入場料1人10ルピー（15円）で誰でも入れるもので、服、小物、本、家電製品、食べ物の露店（ほとんどが伝統的ネワール料理）と野外ステージから成っている（図3参照）。ステージでは、昼から夜8時までネワール民族舞踊、ネワール音楽、ファッション・ショー、抽選会などが行われていた。客は、若者が中心で、1日1000人近くが集まる大盛況であった。司会はネワール語で行われ、ネワール文化を守ろうとしていることがよくわかった。

ここで興味深いのは、企画者がほとんどの店をネワール女性自助組織ミサ・プツァに任せたことである。ミサ・プツァの料理店では、モモ（ネワール餃子）とヨマリ（ネワールの甘い蒸しパン）、ウォー、ミルク･ティー、アイスクリーム、ビール、ジュース等を販売していた。商品を販売するミサ・プツァでは、前述の洋裁トレーニングで製作した、クルタ、小物、刺繍したパシュミナ等を商品として並べていた。また、ミサ・プツァの中には手製のミニチュア人形でネワールの祭、儀礼を再現し、展示しているところもあった。

パタンのダサインは、これまで、昔から行われているグティによる「ガン・ピャカン」や、先に紹介した家庭での儀礼から成っており、そこでの女性の役

割も厳格に制限されていた。しかし、新しい行事であるバザーが加わったことで、女性たちはこれまでになかった家庭外での活動に携わるようになり、地域活性化、文化復興に貢献している。また、市民にとっても新しい娯楽が登場したといえる。



薄い色のついているブースはミサ・プツァの店舗。それ以外は会社

図 3　Yala Newa Mahotsav 1125（2005 年はネワール暦で 1125 年）でのバザー見取り図

むすび

本稿では、ネワール女性、特に、ゾーシー・カースト集団（ジャーティ）の女性の儀礼における活動を中心に、パタンのダサインの内容と女性の活動の変化を明らかにしてきた。

女性は家中を掃除して清め、家や寺院の神への料理をつくり、家庭内のプジャをし、親族を家に呼び合い、特別な料理をつくり、親族間のもてなしを担う。しかし、儀礼の中心を担うのは男性の役割である。儀礼に参加する場合には女性は必ず男性の後でなければならない。さらに、パタン全体の共同の儀礼からは、女性は完全に排除されてきた。

フィールドワーク中、ダサインは女神を祀る祭なのに、なぜ女性ばかり忙しいのかと女性たちからしばしば愚痴を聞いた。それでも、女性たちは伝統的役

割を厳格に守っていた。その理由としては、親族の中で年長者の権力が強く、年長者の意見が絶対的であることが挙げられる。また、カースト集団、親族の結びつきが非常に強いので、そのことで、「周りの目」があり逸脱行為は避けられてきた。女性たち自身も、カースト・アイデンティティを持ち、高位カーストの場合は特に、規律を厳格に守ることに誇りを持ってきた。そうした背景が、ネワール族のジェンダー構造を根強いものにしていると思われる。

こうした反面、近年、「ミサ・プツァ」の女性たちはネパール・バサ・マンカカラの支援を受けて、ダサインのバザーで出店を出し、公的な場へ進出している。従来、家庭から出ることのなかった女性たちがコミュニティの公的な場で活躍するようになったのである。つまり、パタンのネワール社会の伝統的なジェンダー構造に大きな変革が起こりつつあるのである。バザーでは、ほとんどのブースをミサ・プツァに託しており、女性の力なしでは成り立たなくなっている。各ミサ・プツァはカースト集団単位で構成されているため、異なるカースト集団毎のブースが並ぶということになる。

ネワール女性たちは現在においても、従来通りの厳格な「伝統的役割」をこなし、しとやかな女性像を演じている。しかし、他方で、バザーにおいて地域活性化、文化復興活動などの「新たな役割」を引き受ける女性も出てきた。これまで家庭内に閉じ込められていた女性たちは「ミサ・プツァ」をつくり団結することで、伝統的なヒンドゥー祭において、家族以外の公的な場で活動するようになった。つまり、ミサ・プツァが、厳格な伝統的なジェンダー構造からの逸脱を可能にしている。確実に、保守的なネワール社会に「ジェンダー構造の変革の兆し」が見えてきているのである。

さらに重要なことは、浄不浄観に基づくカースト間のタブーは厳しく、異なるカースト間の交流はほとんどなかったのだが、ミサ・プツァを通じて、カースト間の交流が始まっていることである。社会構造の変化が、V・ターナーが論じたコムニタス性をもつ女性の創造力によってもたらされつつあるといえよう[21]。ネワール社会の場合、社会の中心に位置付けられカースト構造を厳格に守る「男性」に対し、周縁に位置づけられる「女性」の方がジェンダー構造やカースト構造などの社会構造に変革をもたらす潜在性を持っていると考えられる。外部からの導入をきっかけとし、またそれを内発的に組み替えて成立し発展してきた女性自助組織ミサ・プツァの活動を通じて、そのような潜在的な変革力が外在化しつつあるのではないだろうか。

注

1　本稿は、筆者が2006年に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。
2　以上、本章のネワール族の概要は〈石井1980:115〉による。
3　Regmi 1993:31－35
4　マハラジャン2002:32－33
5　Vergati 2002:63
6　以上、本段落の女性の生活については、〈マハラジャン2002:35〉による。
7　Singh 1988:419－420
8　山上2001: 112－116
9　Regmi1993:83－84
10 石井1977:131－132
11 具体的には、ブラーマンが占星術に従い、祭の始まる15日前から前日までの期間内に、一番最近亡くなった親族の命日と同じ月齢の日を決め、その日に祖先のための祭祀を行う。
12 儀礼的苗床作りの実際については、石井溥が以下のように報告している（石井1977:132）。赤土と砂で30センチ四方ほどの泥の苗床が作られ、そこに大麦（場合によってはトウモロコシ、小麦等も）の種が蒔かれ、ダサイン初日から10日目まで毎日水が与えられる。苗床作りは、各世帯で日の当たらない納戸において行われる。種蒔きの後は、家族全員がチューラ、酒で軽宴会を行う。
13 草で満たされた容器はドゥルガーの存在を象徴するためにそろえられ、ダサインの始まりを儀礼的に知らせるものである（Slusser1996:352）。
14 プゥキ（phuki）とは元来近い父系的関係にある人をさす概念である（石井1976:273－276）。
15 ピートとは石や木などで表現する象徴的姿で、生贄を捧げるものとされ、生や力の中心となる（マハラジャン2002:32）。ネワール族は、誕生日、ダサイン、葬式等にはピートに必ず訪れる。筆者が調査した家庭では、アシュタ・マトリカ（シバの化身であるバイラヴの妃ドゥルガーの化身である8母神）の一神であるバルクマリのピートの分祀を家の中庭につくってあり、そこで、ダサイン中、一族でドゥルガーへの生贄の儀礼を行った。
16 ネパールでは供犠にされる動物は、水牛、山羊、羊、鶏、家鴨の〈雄〉に限られる。これらは、それぞれ、瞋恚、渇望、愚鈍、小心、冷淡を象徴する（高橋1998:19）。
17 ダサインの間、子どもたちが家々の屋上や屋根に上がり、タコあげに興じる。これは、もう雨を降らせないで下さいとの天へのメッセージである（古屋野・渡辺1976:59）。
18 グティ（guthi）は様々な儀礼執行組織を指す言葉で、大規模なものの場合には、寺、祠、土地その他の財産や、それらを管理し、必要な儀礼、礼拝の監督、指揮を行う複数の正式な成員（guthiyar）からなる(人的)組織等を含む（石井1977:129）。
19 アシュタ・マトリカは、強暴性が重要だとされている（Gellner1996:83）。

20 パタンは22の区（ward）に分けられている。
21 V・ターナーは、文化の中心を担うストラクチュアに周縁性を担うコムニタスを対置し、コムニタスが社会変革の創造力をもつとした（ターナー1976）。

引用･参考文献

石井溥 1976「ネワール村落におけるカースト内組織-phukiとsana guthi-」『民族学研究』40巻4号
石井溥 1977「ネワール村落におけるguthi(特に限定成員guthiについて)ネワール村落調査報告－4」『アジア・アフリカ言語文化研究』13巻
石井溥 1980『ネワール村落の社会構造とその変化』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
古屋野正吾・渡辺雅子 1976「ネワール族の生活慣行―ネパール調査の記録から」『人文学報』 (115)49-64東京都立大学人文学部 編/東京都立大学人文学部
高橋渉 1998「ネパールにおける〈ダサイン祭り〉の供犠」『宮城学院女子大学研究論文集』88
ターナー、ヴィクター 1976『儀礼の過程』（富倉光雄訳）思索社
マハラジャン、ケシャブ・ラル 2002「カトマンズ近郊の都市フロンティア―パタン市の街形成を事例に」『三田学会雑誌』95巻2号
山上亜紀 2001「ケガレにまつわる観念とその諸相ネパール･バフンの視線」『成蹊人文研究』9号
Gellner, David N. 1996 *Monk, householder, and Tantric Priest.* Cambridge University Press
Regmi, Rishikeshab Raj 1993 *Kathmandu, Patan&Bhaktapur.* Nirala Publications
Singh, Gopal 1988 *The Newar*. Himalayan Booksellers
Slusser, Mary S. 1998 *NEPAL MANDALA: A Cultural Study of the Kathmandu Valley*, Princeton University Press, Princeton
Vergati, Anne 2002 *Gods, Men and Territory*. Manohar Publishers & Distributor